

先祖帰り強力……???

まずは強力の生い立ちからお話しいたしましょう。

文献によりますと、明治 24 年(1891)鳥取県東伯郡下中山村(現大山町)の渡辺信平翁が、稲の選穂培養を始めたのがきっかけとされております。十余年の試作の後、5 種類の有望種を得ることとなり、その有望種のひとつに「強力」と名付けました。さらに大正 4 年(1915)、鳥取県農試は強力を純正化するための純系分離を開始。「強力 1 号」から「強力 10 号」までを仕立て、そのうちの 1 号と 2 号を選んで純系淘汰を完了。大正 10 年(1921)に鳥取県の奨励品種に採用されています。その内、強力 2 号は酒米として優れた特性を発揮し、その名は県外にも轟かせ、作付面積は大正 13 年(1924)が最高で、10,225ha にも達しておりました。これは当時の鳥取県水稲作付面積の 3 分の 1 の広さを誇ります。しかしながら新品種の出現により急速に減少し、昭和 20 年(1945)、強力は奨励品種から廃止されました。理由は新品種に比べて病害虫に弱く、倒伏しやすく、低収であったためです。農業の変遷とともに、昭和 28 年(1953)強力は鳥取県内圃場から完全に姿を消してしまいました。

何故強力なる名前が付けられたのか。文献には記述がありませんが、おそらくはその稲姿ではないかと言われている。「あれは稲の姿ではない、まるで茅(かや)ではないか。」とは当蔵の先代、故山根常愛が残した言葉であり、初めて見た強力のごつい風貌に驚き、その時の興奮ぶりを今に伝えます。

しかしながら、現在の強力の稲姿を見るにあたり、その面影は薄いと言われます。およそモンゴロイドが海を渡って現代人になったかのように、そのスラッとした稲の恰好からは、何らかの変遷を感じずにはおれません。

これは近代農業がもたらした環境変化ではないかと考えます。強力は化学肥料や農薬がなかった時代の品種であり、肥料耐性や農薬耐性が劣ります。つまり毎年少しずつ影響を受けていく中で、現在の姿に変わってきたのではないのでしょうか。おそらくは、最も影響を与えているのが除草剤と考えます。現在の除草剤はホルモン系であり、雑草と稲のホルモンバランスの違いを利用して抑草するものです。薬品メーカーは、稲に影響は及ぼさないと謳ってはおりますが、環境ホルモンが植物に全く影響しないわけがありません。

現在強力の種子生産は、「強力をはぐくむ会」の種子担当農家が、指定の採種圃の下で種子生産を行い、同会に所属する他の生産農家に提供するシステムになっております。ただしそれは近代農法での種子栽培であるのです。

平成 20 年秋、当蔵の契約農家である「内田百種園」の内田敬一郎氏より、自場田で採取した強力の種に変更したいという申し出がありました。理由は、強力を育む会か

ら提供される種子に満足出来ないというものでした。

内田百種園は肥料や農薬を使わず、土壌の微生物を活用するバイケミ農法(自然農法)の実践者です。種子もそれにこだわりたいという意気込みを尊重し、自田採種を承諾いたしました。

そして平成 21 年産の育苗が始まった晩春、内田氏の苗箱から不思議な現象が起きました。異常とも思える大きな苗が、二十数本ほど発生していたのです。最初は馬鹿苗病にかかった苗ではないかとも考えましたが、太くたくましいその苗姿から病気に感染しているものとは考えにくく、意見を交わす中で行きついた仮説が「先祖帰り」でありました。これは一般的に起きる突然変異とは少し意味合いが異なります。



平成 21 年 5 月撮影

右が通常の強力苗

左が変異した強力苗

大きさだけでなく、稈が根元から分かれるのが原種強力の特徴のよう

意外かもしれませんが、稲作においては突然変異種は比較的好く目にするものです。一般的に変り穂と呼ばれるものが多く、1 枚の田んぼでせいぜい数本発生し、最終的にはほぼ F1(1 世代)で淘汰されます。今回のポイントは、同型のものが一度に 20 本以上発生したこと、また苗の時点ではっきりとその形状の違いが確認できていることです。

我々は、この先祖帰りの要因についてこう仮説を立てました。もともと農薬耐性がなかった種が、20 年以上に渡り近代農法によって異種或いは異系化し、それがバイケミ農法によって本来の種が覚醒したのではないかと。というものです。

そこで強力復活の立役者、元鳥取大学農学部教授で、現強力を育む会の代表幹事、木下収先生にその苗を見ていただいたところ、まさにあの当時の強力苗の恰好であることを確認していただきました。また、我々が唱えた仮説についても、そう考えるのが妥当だろうとの見解もいただきました。

早速、内田百種園では、この二十数本の苗を種採り用として育稲しつつ、さらにその種を22年産で増やし、平成23年産において、この先祖帰り強力で1仕込みが出来る収量を確保する計画に入りました。

そんな中、別の検証も行う必要もありました。これが本当に先祖帰りであるならば、2年目の22年産において、理論上は数百倍もの変異苗が発生するはずですが、もしそうならなかった場合、それは一時的な変異株として見なすべきこと、とも考えました。

そして迎えた22年産の苗作り。それはまさに圧巻の光景でした。およそ半分以上が先祖帰り現象を起こし、私たちの立てた仮説は、ほぼ正しいものと結論付けたのです。



22年産で採れた種子は十分すぎるほど確保が出来、余った分については既に一部の製品の原料に使用しました。実は、現在出荷中の「鍛造生酏強力 22BY」には、この先祖帰り米が60%ほど使用されております。

23BY酒にて、初めて使用比率100%の先祖帰り強力を仕込むことが出来た訳ですが、同じ製造設計にて2種類の桶を立てました。ひとつは「内田米仕様」、そして内田氏から種の提供を受け、弊社杜氏が栽培した「前田米仕様」です。

今回リリースいたします「先祖帰り強力純米酒 23BY酒」は、「内田米仕様」の商品であります。「前田米仕様」につきましては、平成25年1月以降のリリースとさせていただきます。

尚、「内田米」「前田米」ともに、価格は変わりません。

内田米仕様の詳細は下記の通りご案内いたします。

商品名:日置桜 先祖帰り強力純米酒 Ver.内田米

酒造年度:平成 23BY

容量サイズ:1800mlのみ

原料 米:強力(内田百種園 バイケミ農法米)

精米歩合:80%

アルコール分:15.7度

日本酒度:9.0



酸 度:2.3

アミノ酸度:1.5

使用酵母:協会7号

希望小売価格:2,783円(税込)

2,650円(本体)

発売予定日:平成24年12月1日

出荷数量:800本限定